

地域協働型アクティブ・ラーニングによる 学習効果に関する研究

—保育者養成における幼児の読書普及活動を中心に—

中 村 勝 美*

(2020年1月7日 受理)

A Study on Learning Effect Through Community-based Active Learning: With Special Reference to Stuffed Animal Sleepover as a Service Learning for Early Years Teacher Training

Katsumi NAKAMURA*

One of the most serious challenges facing higher education today is the qualitative transformation of higher learning - from universities that teach knowledge and skills to universities that develop student's ability to think critically. Our experience with "Children Challenge Lab" initiative suggests that service learning can be an important opportunity for nursery training 4-year college students to think about their future career and to clarify their challenges.

Keywords: active learning アクティブ・ラーニング, promoting reading 読書普及活動, early years teacher training 保育者養成, service learning サービス・ラーニング, stuffed animal sleepover ぬいぐるみのお泊り会

1. はじめに

本研究の目的は、保育者を志望する学生を対象として、問題解決能力や他者と協働する力を育成するために、アクティブ・ラーニングの手法を取り入れた地域協働型プログラムを実施し、プログラムの学習成果を質問紙調査により明らかにすることである。研究を通じて明らかになった知見をもとに、保育者養成課程に地域協働型アクティブ・ラーニングを導入する際の指導法のあり方、必要な環境整備、学習効果や課題について検討する。

2. 大学教育の新たな方向性とアクティブ・ラーニング

現在、わが国では、情報化や技術革新、グローバル化により予測を超えた変化の激しい社会を生きるために必要な力である「生きる力」を育成するため、初等教育から高等教育に至るまであらゆる教育段階で改革が進行中である。その具体的な進行を表1-1に示した。

これら教育改革の背景には、知識基盤型社会への移行に伴う産業構造の変化と日本の経済的地位の後退、2000年以降のOECDによるPISA型学力やキー・コンピテンシーをめぐる国際的な教育改

* 広島女学院大学人間生活学部児童教育学科教授

表 1-1 わが国における教育改革の動向

年	事項	内容
2012年	中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学」	予測困難な時代において自ら未来の社会像を創り出すために、学術研究および教育において大学が担うべき責任は重大であることをふまえ、学士課程教育における質的転換の方策として、生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力をもった人材を育成するアクティブ・ラーニングへの転換が打ち出された。
2014年	「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）」	学力の三要素を、社会で自立して活動していくために必要な力という観点から捉え直し、高等学校教育を通じて（i）これからの時代に社会で生きていくために必要な、「主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度（主体性・多様性・協働性）」を養うこと、（ii）その基盤となる「知識・技能を活用して、自ら課題を発見しその解決に向けて探究し、成果等を表現するために必要な思考力・判断力・表現力等の能力」を育むこと、（iii）さらにその基礎となる「知識・技能」を習得させること、大学においては、それを更に発展・向上させるとともに、これらを総合した学力を鍛錬することとした。
2016年	高大接続システム改革会議「最終報告」	「高校生のための学びの基礎診断」実施方針及び「大学入学共通テスト」実施方針を策定し、「平成33年度大学入学者選抜実施要項の見直しに係る予告」を決定。
2017年	幼稚園、小学校、中学校の各学習指導要領の改訂	加速度的に変化する社会において、子どもが生涯にわたって能動的に学び続けることをめざし、「主体的・対話的で深い学び」いわゆるアクティブ・ラーニングの視点からの授業改善を充実させる。

(引用文献より筆者作成)

革の動向への危機感がある。従来の知識伝達型教育から、新たな教授・学習形態に移行することが世界的な傾向であるが、この変革のキー概念となるのが、「主体的・対話的で深い学び」とも呼ばれるアクティブ・ラーニングである。

アクティブ・ラーニングとは、学習者の能動的な学習への参加を取り入れた教授・学習法のことである。具体的手法としては、発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等のほか、教室内でのグループ・ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等がある。基礎学力、標準性、知識量、順応性などの能力は従来の知識伝達型教育でも育成できるが、多様性、創造性、チャレンジ性、個別性、能動性、リーダーシップ性などは、知識伝達型、暗記型の教育では達成に限界があるという認識が共有されるとともに、実践知、応用知の獲得にはアクティブ・ラーニングとの親和性が指摘されている¹⁾。

2012年の「質的転換答申」を契機として、わが国の大学においても「何を学ぶか」だけでなく、「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」が重要視されるようになっている。大学においては、従来の知識の伝達・注入を中心とした講義形式の授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を作り、学生が主体的に問題を発見し、解を見出していく能動的な学習への転換が求められている。

大学改革の背景と方向性の是非を問うことは本稿の中心的課題ではない。しかしながら、アクティブ・ラーニングによって育成される、多様性、創造性、チャレンジ性、個別性、能動性、リーダーシップ性等は保育者の資質としてきわめて重要であるといえよう。

3. 幼児の読書支援活動の概要と特徴

本研究の調査対象である「ぬいぐるみのお泊まり会」は、幼児期に図書館や読書の楽しさに触れ、読書習慣を身につけるための取り組みとして、近年、各地の図書館で実施されている²⁾。

広島女学院大学の児童教育学科では、学科内のサークル「子どもふれあいサークル・くれよん」が中心となって、2015年から幼児の読書支援活動としてぬいぐるみのお泊まり会「よるのとしょかん—ぬいぐるみたちのだいぼうけん」を開催してきた。活動の様子を写真1～6に示した。活動内容は下記の通りである。

事前に地域の就学前の子どもとその親を対象として参加者を募集し、来場した子どもたちと読み聞かせを楽しんだ後、ぬいぐるみを預かる。ぬいぐるみは閉館後の図書館でのお泊まり会に参加する。学生は、ぬいぐるみが図書館で絵本を見たり、司書の仕事を手伝ったり、図書館内を冒険したりする様子を写真に収めアルバムを作成し、後日、ぬいぐるみを迎えに来た子どもたちにプレゼントする。アルバムには、事前の保護者へのアンケートを基に子ども一人一人に応じて学生が選定したおすすめの絵本を紹介するページを設けている。

本活動は、アクティブ・ラーニングのなかでも「サービス・ラーニング」として位置づけられる。サービス・ラーニングとは、「地域のニーズ等を踏まえた社会奉仕活動を体験することによって、それまで知識として学んできたことを実際のサービス体験に活かし、また実際のサービス体験から自分の学問的取組や進路について新たな視野を得る教育プログラム」³⁾のことである。

サービス・ラーニングの導入は、①専門教育を通して獲得した専門的な知識・技能の現実社会で実際に活用できる知識・技能への変化、②将来の職業について考える機会の付与、③自らの社会的役割を意識することによる、市民として必要な資質・能力の向上、などの効果が期待できるとされる。本取組においてはとくに①および②の効果が期待される。

4. 研究の目的と方法

1) 調査の目的

「よるのとしょかん」に参画した学生を対象として、学習成果と達成度、今後の課題について意識調査を行う。サークルの中心として企画を担当した3年生と、ボランティアとして参加した1、2年生において、学習成果、達成度、今後の課題についての意識に差がみられるかを比較検討する。

2) 調査方法・対象

質問紙調査により行う。質問は2項目を多肢選択法、2項目を自由記述、19項目を4段階評定法で回答を得た。調査票は活動終了後に対象者に直接手渡し、その場で回答してもらい回収した。

回答者数は、3年生（企画担当）7名、1・2年生22名で、回収率は100%であった。（調査日2019年7月27日及び29日）

3) 調査票について

調査票は23項目からなり、学年（1項目）、「よるのとしょかん」での役割について（1項目）、活

動への参加度や達成度（7項目）、活動を通して得た知識・技能（6項目）、今後の課題（8項目）に分類される。

5. 結果と考察

この活動に対し、自分がどのように関わり、どのような成果や達成感を得たか、また自分自身の今後の課題をどのように捉えたかを、1) 活動の自己評価、2) 学習成果、3) 今後の課題の3点から分析し、結果を表5-1～5-3に示した。平均値は4段階評定の「かなりそう思う」を4点、「そう思う」を3点、「あまり思わない」を2点、「全く思わない」を1点として算出した。

1) 活動の自己評価

1～7の項目について、取り組みに対する自分自身の行動を4段階で自己評価してもらった。

表5-1 活動の自己評価

	質問	全体	3年生	1・2年生
1	必要なことを事前に考え、主体的に準備に取り組んだ。	3.24	3.14	3.27
2	同じ仕事を受け持った担当者間で十分な話し合いをした。	3.59	3.57	3.59
3	別の仕事を受け持っているグループ間および全体で十分な話し合いをした。	3.38	3.57	3.32
4	読み聞かせ・お迎え会当日は、必要なことを考え主体的に動くことができた。	3.00	3.14	2.95
5	リーダーや教師の指示に従って動くことが多かった。	3.38	3.57	3.32
6	アルバム作りでは自分のアイデアを出したり、工夫することができた。	3.69	3.29	3.82
7	準備や当日の活動において、メンバーと協力することができた。	3.69	3.71	3.68

「同じ仕事を受け持った担当者間で十分な話し合いをした」「準備や当日の活動において、メンバーと協力することができた」の2項目について、自己評価の平均値は高くなっており、ほとんどの学生がメンバー間で協力し合って活動できたことがうかがえた。

「4. 当日は主体的に動くことができた」は相対的に低い値となっており、また「5. リーダーや教師の指示に従って動くことが多かった」についても「そう思う」「かなりそう思う」と感じた人が多かったことから、リーダーシップを発揮して活動できたと感じた人はそれほど多くなかったと思われる。主体性を持って活動に参加するために、どのようなプログラムにすべきか、引き続き検討が必要である。

一方、個人または2、3名の小グループで行ったアルバム作りでは3年生と1・2年生の結果に差が見られた。「6. 自分のアイデアを出したり、工夫することができた」について、3年生の平均値は3.29であるのに対し、1・2年生は3.82であった。3年生と1・2年生の自己評価の平均値の差が統計的に有意か確かめるために、t検定を行った結果、 $t(27) = -2.46, p < .05$ で有意差がみられた。1・2年生は、当日の主な役割がぬいぐるみの写真撮影とアルバム制作だったため、この作業に集中し、創意工夫しながら作品を作ることができた。しかし、3年生は全体のプログラムの進行や受付、読み聞かせ会の実施など、午前中は多くの業務が集中し、午後のアルバム制作の時間帯も素材の配布や図書館での撮影場所の設営、ボランティアで参加している1・2年生への配慮等、自らのアルバム作成以外に多くの仕事があった。そのため、アルバム作りに没頭するだけの余裕がな

かったと推察される。3年生は個人でアルバム作りをしたのに対し、1・2年生の場合は、作業の負担が軽くなるよう、1体のぬいぐるみに対し2名以上で作業するように計画していた。そのため、ペアの学生と話し合い、アイデアを出しながら楽しく制作を進めている様子が見られた。

2) 学習成果

1～5の項目について、取り組みを通じて習得できたかどうかを、4段階で自己評価してもらった。

表5-2 学習成果

	質問	全体	3年生	1・2年生
1	読み聞かせや手遊びなどの保育技術	3.59	3.43	3.64
2	イベントの企画や運営の方法	3.45	3.71	3.36
3	保護者とのコミュニケーションの取り方	3.21	3.29	3.18
4	子どもとのコミュニケーションの取り方	3.48	3.57	3.45
5	絵本の選び方や絵本の内容	3.62	3.86	3.55

アルバム作成を通じて、絵本の選び方や内容に対する知識・理解や読み聞かせや手遊びなどの保育技術を習得できたと感じた学生が多いことがうかがえた。1・2年生は実際には、読み聞かせやパネルシアター、手遊びを主として行ったわけではなく、3年生の実演を見ながら会場の後方から参加しただけであったが、そこから多くを学んだと感じたようである。

「2. イベントの企画や運営の方法」について、3年生の平均値は3.71で、1・2年生の平均値は3.36であった。3年生と1・2年生の自己評価の平均値について、t検定を行った結果、 $t(27) = 1.44$ で有意差があるとはいえなかった。

3) 今後の課題

1～5の項目について、取り組みを通して今後学ぶ必要があると感じたかを4段階で評価してもらった。

表5-3 今後の課題

	質問	全体	3年生	1・2年生
1	読み聞かせや手遊びなどの保育技術	3.72	4.00	3.64
2	イベントの企画や運営の方法	3.48	3.57	3.45
3	保護者とのコミュニケーションの取り方	3.52	3.86	3.32
4	子どもとのコミュニケーションの取り方	3.69	4.00	3.59
5	絵本の選び方や絵本の内容	3.48	3.43	3.50
6	この活動をきっかけに保育者としてもっと成長したいと思った。	3.45	3.71	3.36

3年生では、「1. 読み聞かせや手遊びなどの保育技術」「4. 子どもとのコミュニケーションの取り方」について「かなりそう思う」と回答した学生が100%となっており、保育者の基礎的な技術

について、今後学習する必要性を強く意識したことが分かった。多くの学生がこの取り組みを通して自己の課題について強く意識するきっかけを得たのではないと思われる。

「3. 保護者とのコミュニケーションの取り方」を今後学ぶ必要があると感じたかについて、3年生の自己評価の平均値は3.86で、1・2年生の平均値は3.32であった。3年生と1・2年生の自己評価の平均値について、t検定を行った結果、 $t(27) = 2.08, p < .05$ で有意差がみられた。1・2年生は取り組みのなかで保護者と関わる機会はほとんどなかったため、学習課題として意識化されなかったのではないかと推察される。

「6. この活動をきっかけに保育者としてもっと成長したいと思った」について、3年生は平均3.71で、1・2年生は3.36であった。3年生と1・2年生の自己評価の平均値について、t検定を行った結果、 $t(27) = 1.64$ で有意差があるとはいえなかった。

6. おわりに

調査の結果、サービス・ラーニングへの参画を通じて、他者との協働性、創造性が育成されたことがうかがえた。また、絵本の読み聞かせやパネルシアターの実演、未就学児とその親との触れ合いといった実体験により、学習課題が意識化されることが示唆された。

2か月以上の期間をかけて企画・立案から携わった3年生と事前打ち合わせと当日参加のみの1・2年生を比較すると、取り組みの意欲や主体性、学習成果について、3年生の方がより高い傾向が見られたが、多くの項目で有意差があるとはいえなかった。調査時点では、1・2年生はともに学外での実習経験がないため、未就学児と接するのが短時間であっても、鮮烈な印象を受けることが推察される。

1・2年生は自分たちが担当した「アルバム作り」に対し、強い達成感を感じていた。また、実際に担当しなかった役割についても、先輩の姿から多くを学ぶことができたと感じ、その結果、取り組みへの意欲、学習効果への自己評価や今後の学習への動機づけが高くなることがうかがえた。このことは、4年制の保育者養成課程において、学外実習を経験する以前に、教育課程外でサービス・ラーニングを取り入れることにより、学生が職業について考える機会を与え、専門的知識・技術の獲得が現場でどのように活かされるかを体験的に学ぶ貴重な機会となりうることを示唆する。学士課程教育の全体のなかでサービス・ラーニングをどのように位置づけるのか、複数の学年にわたる学生の役割分担や1・2年生の参画の在り方について、今後も引き続き検討したい。

謝辞

本研究は、2019年度広島女学院大学学長裁量経費、研究活動助成を受けて実施されました。ここに記して感謝申し上げます。

注

- 1) 山田礼子(2019) 2040年大学教育の展望—21世紀型学習成果をベースに— 東信堂, 63頁。
- 2) 中村勝美(2016) 幼児の読書活動支援と保育者養成教育に関する研究—「よるのとしょかん」の実践を中心に— 広島女学院大学幼児教育心理学科研究紀要 第2号, 9-16頁。
- 3) 中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学」用語集, 38頁。

引用・参考文献

中央教育審議会「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学（答申）」、2012年8月。

中央教育審議会「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について（答申）」、2014年12月。

中央教育審議会「これからの学校教育を担う教員の資質向上について～学び合い、高めあう教員育成コミュニティの構築に向けて（答申）」、2015年12月。



写真1 待ち時間にダンスをする学生



写真2 先輩に合わせて踊る1・2年生



写真3 手遊び



写真4 パネルシアターの伴奏



写真5 ぬいぐるみを預かる様子



写真6 図書館を冒険するぬいぐるみたち